

# === T A C S 情報 第 3 号 ===

(Toyama Agricultural Cultivation Management Information System)

令和 5 年 6 月 13 日

農業技術課 広域普及指導センター

## 1 気象経過

### (1) 気温

5月の平均気温は、18.0℃（対平年差+0.5℃）と平年に比べ高かった。

6月上旬の平均気温は、21.2℃（同+0.9℃）と平年に比べ高かった。

### (2) 降水量

5月の降水量は、260.0mm（対平年比 212%）と平年に比べかなり多かった。

6月上旬の降水量は、122.5mm（同 581%）と平年に比べかなり多かった。

### (3) 日射量

5月の平均日射量は、19.7MJ/m<sup>2</sup>/日（対平年比 107%）と平年に比べ多かった。

6月上旬の平均日射量は、19.7MJ/m<sup>2</sup>/日（同 101%）と平年並であった。

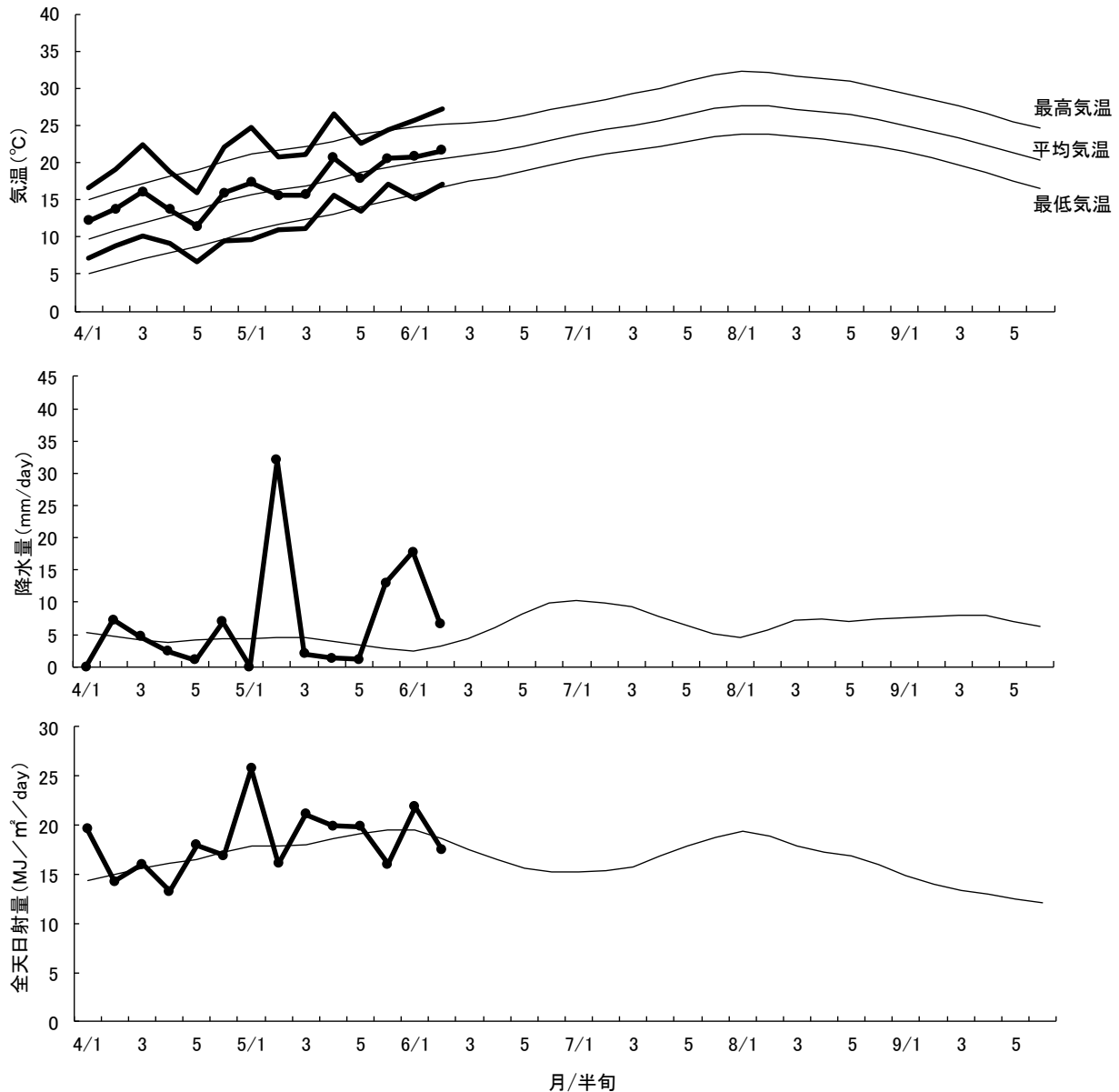


図 1 令和 5 年の気象経過（富山地方气象台）

## 2 生育状況（生育観測ほデータ）

### (1) コシヒカリ

平年に比べ、草丈、茎数、葉齢、葉色は並となっている。

表1 「コシヒカリ」の生育状況（6月13日 生育観測ほ）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色	
			(本/株)	(本/m <sup>2</sup> )		葉色板	SPAD
R5	5月13日	32.1	17.7	384	8.2	4.3	40.1
R4	5月13日	31.1	18.4	406	8.1	4.3	39.8
平年	5月14日	34.0	17.8	387	8.2	4.3	40.1
前年比・差	0	103	96	95	0.1	0.0	0.3
平年比・差	-1	95	99	99	0.0	0.0	0.0

注) 平年 : H25~R4の平均

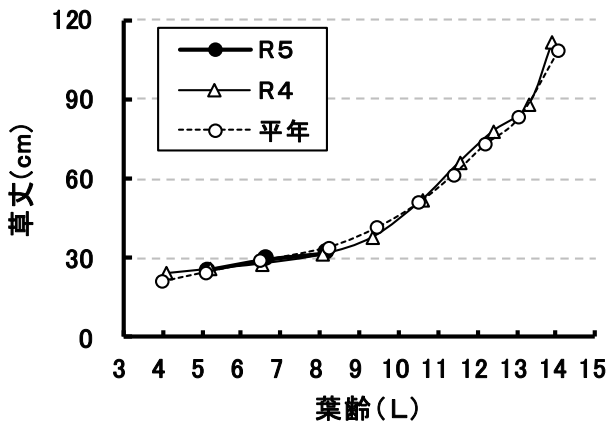


図2 草丈の推移（生観コシヒカリ）

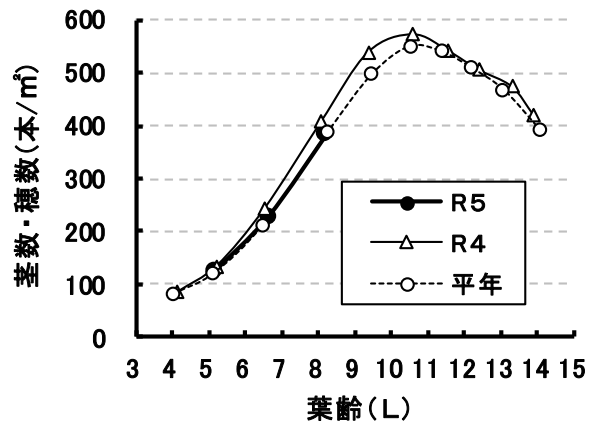


図3 茎数の推移（生観コシヒカリ）

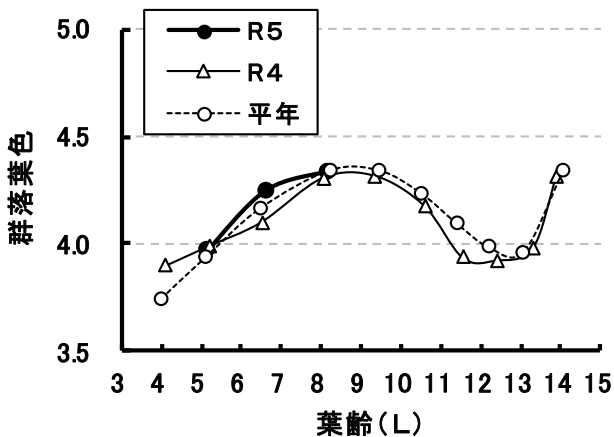


図4 葉色の推移（生観コシヒカリ）

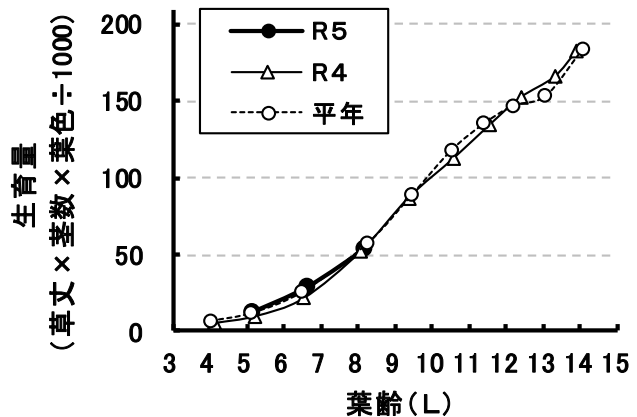


図5 生育量の推移（生観コシヒカリ）

(2) てんたかく

平年に比べ、草丈はやや短く、茎数、葉色は並、葉齢は0.2葉遅れている。

葉齢を揃えて比較すると、平年に比べ、草丈は並、茎数はやや多く、葉色は並となっている。

葉齢から予測すると、幼穂形成期は、6月26日頃と見込まれる。

表2 「てんたかく」の生育状況（6月13日 生育観測ほ）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色		幼穂 形成期
			(本/株)	(本/m <sup>2</sup> )		葉色板	SPAD	
R5	5月3日	35.6	25.3	538	9.4	4.5	41.7	(6月26日)
R4	5月1日	34.0	26.8	582	9.7	4.4	41.6	6月25日
平年	5月4日	38.5	25.9	554	9.6	4.6	42.1	[6月25日]
前年比・差	2	105	94	92	-0.3	0.1	0.1	(1)
平年比・差	-1	92	98	97	-0.2	-0.1	-0.4	[1]

注1) 平年 : H25~R4の平均、ただし幼穂形成期の平年値 [ ] は、R2~4年の平均

注2) 本年の幼穂形成期は、6月13日現在の葉齢から予測。

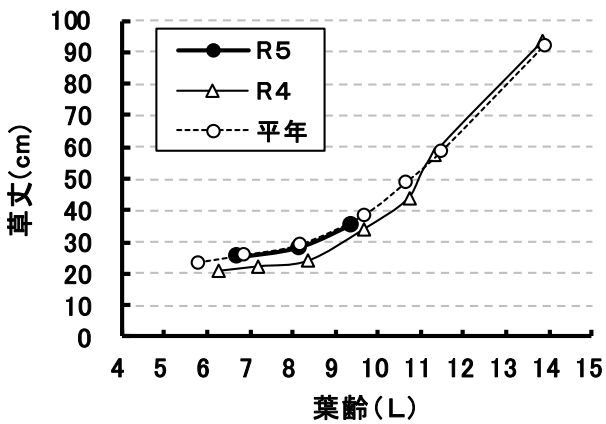


図6 草丈の推移 (生観てんたかく)

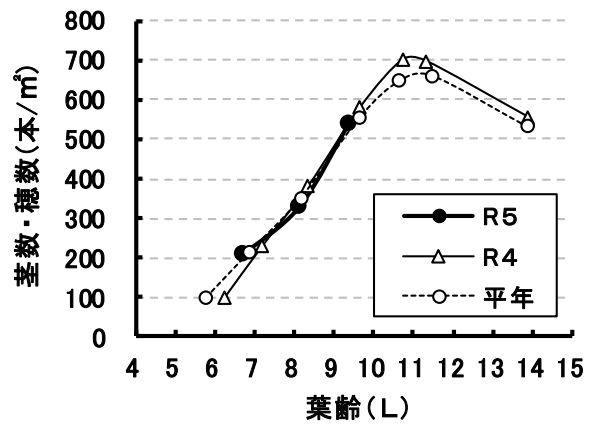


図7 茎数の推移 (生観てんたかく)

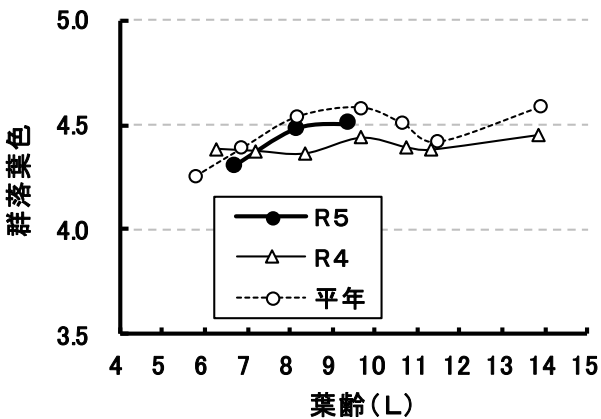


図8 葉色の推移 (生観てんたかく)

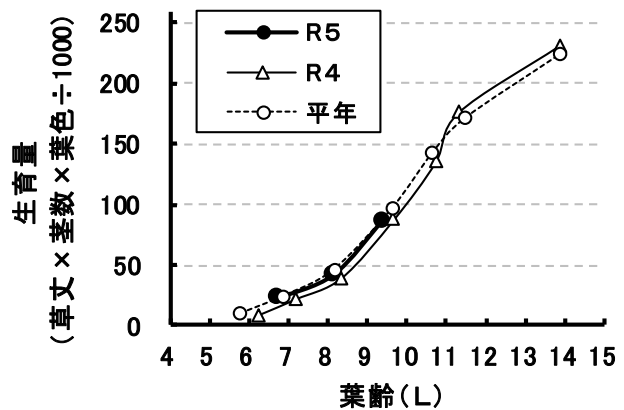


図9 生育量の推移 (生観てんたかく)

### (3) てんこもり

平年に比べ、草丈はやや短く、茎数はやや少なく、葉色は並、葉齢は0.5葉遅れている。

葉齢を揃えて比較すると、平年に比べ、草丈、葉色は並、茎数はやや多くなっている。

表3 「てんこもり」の生育状況（6月13日 生育観測ほ）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色	
			(本/株)	(本/m <sup>2</sup> )		葉色板	SPAD
R5	5月10日	27.5	23.7	459	8.9	4.6	40.2
R4	5月8日	27.2	23.4	447	9.0	4.4	41.5
平年	5月8日	30.4	26.4	502	9.4	4.5	41.4
前年比・差	2	101	101	103	-0.1	0.2	-1.3
平年比・差	2	90	90	91	-0.5	0.1	-1.2

注) 平年 : H25~R4の平均

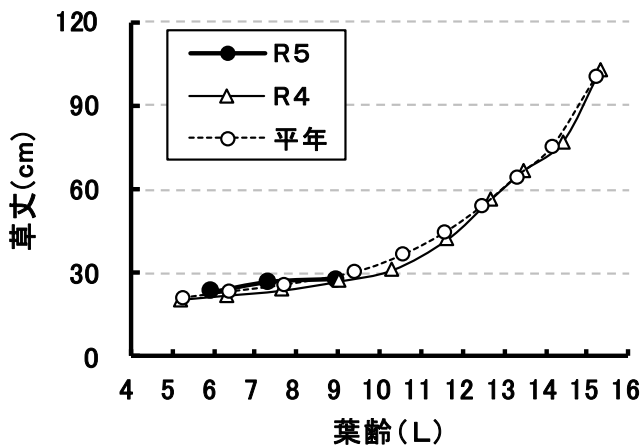


図10 草丈の推移（生観てんこもり）

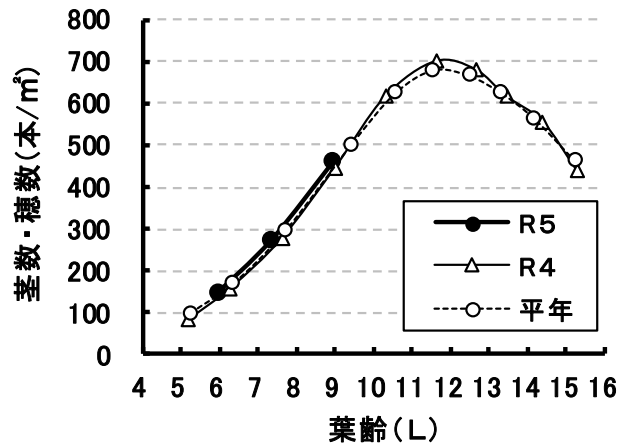


図11 茎数の推移（生観てんこもり）

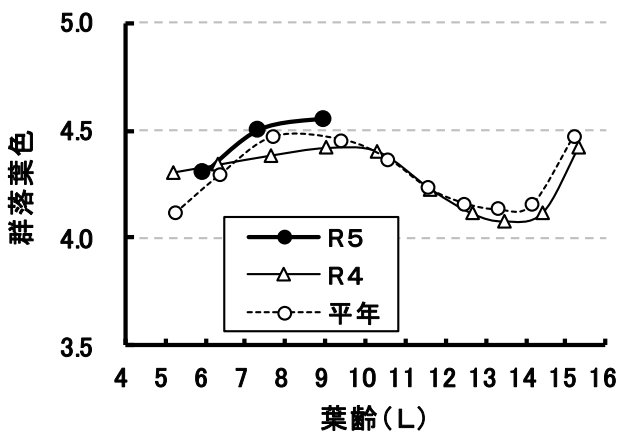


図12 葉色の推移（生観てんこもり）

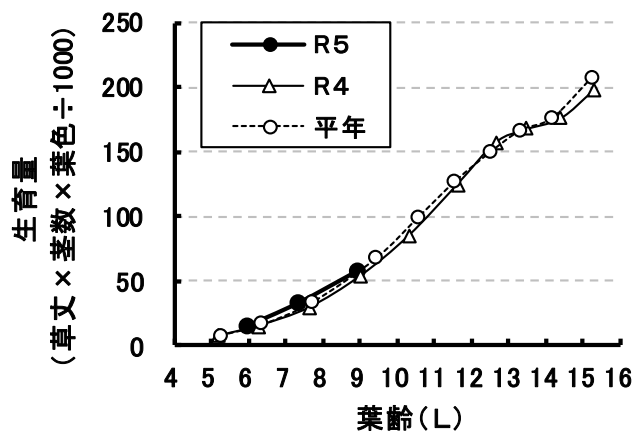


図13 生育量の推移（生観てんこもり）

### 3 当面の技術対策

- ・ 中干しとその後の間断かん水で、幼穂形成期頃までに足跡の深さ 3 cm 程度の土壌硬度に誘導する。
- ・ 幼穂形成期以降は、飽水管理（足跡に水が残る程度の湿潤状態を維持）を行う。

#### (1) 「コシヒカリ」の管理

- ・ まだ中干しを実施していないほ場は、早急に中干しを開始する。
- ・ 今後、葉色の急激な低下を防ぐため、中干し後の間断かん水は、乾かしすぎないように管理し、幼穂形成期頃までに土壌硬度を「足跡の深さ 3 cm 程度」に誘導する。
- ・ 安易な窒素の中間追肥は、過剰分げつや過剰籾数となるので原則、施用しない。また、作付前にケイ酸質資材を散布していないほ場では、積極的にこれらの資材を散布し、稈質を強くする。



中干しの終了時に、ほ場中央部でくるぶしまで軽く沈む程度を目安とする。

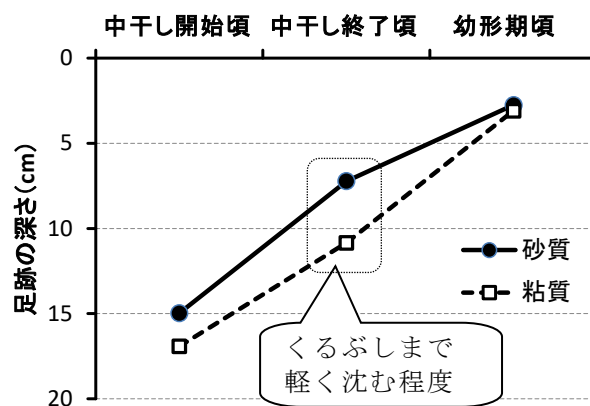
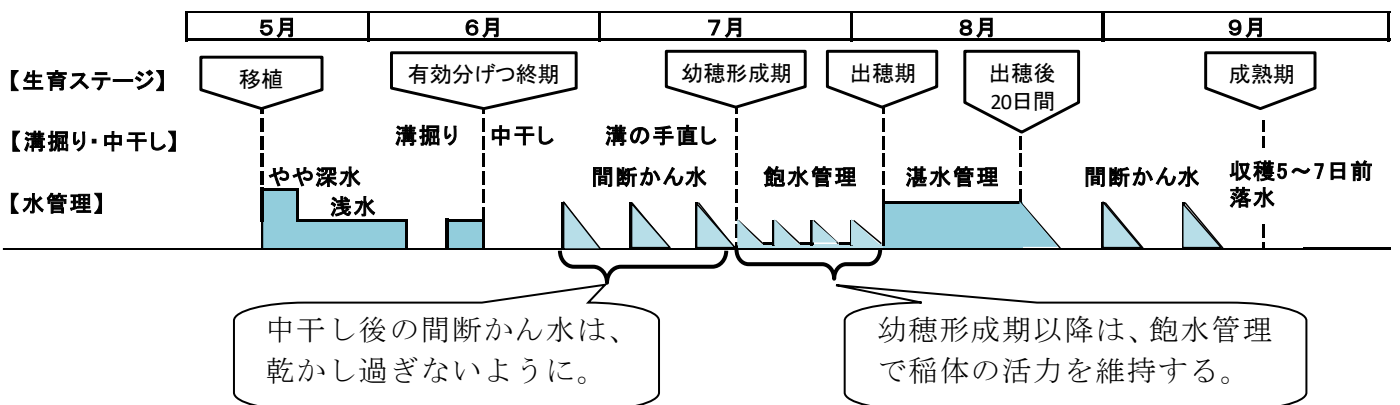


図 14 ほ場中央部の足跡の深さの推移 (H22、23 生育観測ほ)

#### <水管理のイメージ>



## (2) 「てんたかく」の管理

- ・ 現段階で生育観測ほの幼穂形成期は、平均で6月26日頃と見込まれる。
- ・ 今後、葉色の急激な低下を防ぐため、中干し後の間断かん水は乾かしすぎないように管理する。
- ・ 肥効調節型基肥栽培では、安易な追肥は過剰籾数や倒伏を招くので原則、施用しない。ただし、現在の葉色が4.0(砂壤土4.2)より淡い場合は、直ちに窒素成分で1.0kg/10a程度の追肥を行う。
- ・ 分施体系では、各ほ場の幼穂形成期を確認し、表5を目安に穂肥を施用する。ただし、過剰籾数を防ぐため、壤土～埴壤土では、幼穂形成期の葉色が4.3以上かつ茎数650本/m<sup>2</sup>以上の場合、沖積砂壤土では葉色が4.5以上かつ茎数700本/m<sup>2</sup>以上の場合には、1回目の穂肥は施用しない。
- ・ 幼穂形成期以降は、稲体の水分要求量が高まるので、飽水管理を行う。

表4 生観「てんたかく」の幼穂形成期

品種	年次	田植日 (月/日)	6/13時点の		幼穂形成期	
			葉齢(L)		(月/日)	葉齢(L)
てんたかく81	R5	5/3	9.4		6/26	(11.2)
	R4	5/1	9.7		6/25	11.2
	R3	5/3	9.1		6/27	11.1
てんたかく	H23～R元	5/5	9.5		6/28	11.6

表5 「てんたかく」の土壤区別穂肥窒素施用量の目安(kg/10a)

土壤区分	1回目		2回目	
	施用時期		施用時期	
	幼形期	幼形期の10日後		
沖積 埴壤土	1.5	1.5		
	1.5	1.8		
	2.0	2.0		
洪積 埴壤土～壤土	1.5	1.8		

## (3) 「てんこもり」の管理

- ・ まだ中干しを実施していないほ場は、早急に中干しを開始する。
- ・ 今後、葉色の急激な低下を防ぐため、中干し後の間断かん水は、乾かしすぎないように管理し、幼穂形成期頃までに土壤硬度を「足跡の深さ3cm程度」に誘導する。
- ・ 肥効調節型基肥栽培、分施体系のいずれにおいても、幼穂形成期以前に葉色が4.0(砂壤土4.2)より淡くなる場合は、直ちに窒素成分で1.0kg/10a程度の追肥を行う。

#### (4) 病虫害防除の徹底

##### ア 斑点米カメムシ類

- 今後、気温の上昇に伴い発生量が多くなると見込まれるので、イネ科雑草の穂が出な  
いよう草刈りを徹底する。

※草刈り運動期間：7月1日（土）～10日（月）  
一斉草刈り日：7月1日（土）～2日（日）

- 本田内のノビエやホタルイも、斑点米カメムシ類による被害を助長するので、除草に努める。

##### イ ニカメイチュウ ※平年の越冬世代成虫の発蛾最盛期：6月1日（R4：5月23日）

- 要防除水準（防除時6月中下旬のさや枯最盛期被害莖率：3%）に基づき防除要否を判定し、適期に薬剤を散布する。
- 前年に被害が多く見られた地域では、幼虫の発生がだらつくため、箱施薬剤を施用した場合でも必要に応じて適期に本田防除を行う。

##### ウ いもち病 ※平年の初発確認日は7月12日（R4：7月20日）

- 苗箱施薬を施用していない場合は、予防粒剤を6月20日頃までに散布する。
- 現在、感染好適日は出現していないが、BLASTAM 情報（農業研究所）を参考に、常発地を中心に巡回し、葉いもちの発生がみられたら直ちに防除する。

BLASTAM 情報（葉いもち予測システム）はこちらから →  
（農林水産総合技術センター農業研究所HPの研究関連情報に掲載）



##### エ 紋枯病 ※平年の初発確認日6月23日（R4：6月22日）

- 前年発生がみられたほ場で箱施薬剤を施用していない場合は、出穂3～4週間前（粒剤）または穂ばらみ期（粉剤、液剤等）の防除を確実に行う。
- 本田防除は要防除水準に基づき防除要否を判定し（表6）、適期に薬剤が株元に付着するように散布する。

表6 紋枯病の薬剤散布適期と要防除水準

品 種	薬剤散布適期 （防除要否判定時期）	要防除水準 （発病株率）
てんたかく	出穂14日前頃	5%
コシヒカリ	出穂10日前頃	15%
てんこもり	出穂 7日前頃	(15%) ※

※「てんこもり」要防除水準（発病株率）は暫定値

##### オ 白葉枯病

- 大雨により浸水や冠水した場合、白葉枯病が発生しやすくなるので、常発地等では、オリゼメート1キログラム粒剤を出穂3～4週間前に散布する。

# 「富富富」の生育状況と当面の技術対策について

## 1 生育状況（生育観測ほ等データ）

近年に比べ、草丈、茎数、葉色は並、葉齢は0.3葉遅れている。

葉齢を揃えて比較すると、近年に比べ、草丈、葉色は並、茎数は多くなっている。

表1 「富富富」の生育状況（6月13日 生育観測ほ等）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢 (L)	葉色	
			(本/株)	(本/m <sup>2</sup> )		葉色板	SPAD
R5	5月16日	28.5	16.9	363	7.6	4.4	40.0
R4	5月16日	28.1	15.9	334	7.6	4.3	39.8
近年	5月15日	29.8	16.6	356	7.9	4.4	41.4
前年比・差	0	102	106	108	0.0	0.1	0.2
近年比・差	1	96	102	102	-0.3	0.0	-1.4

注1) R5：10ほ場平均（生育観測ほ：4ほ場、栽植密度・遅植え・プラ改善（内立山、小矢部）対照区：6ほ場）

注2) 近年値：H29～R4平均

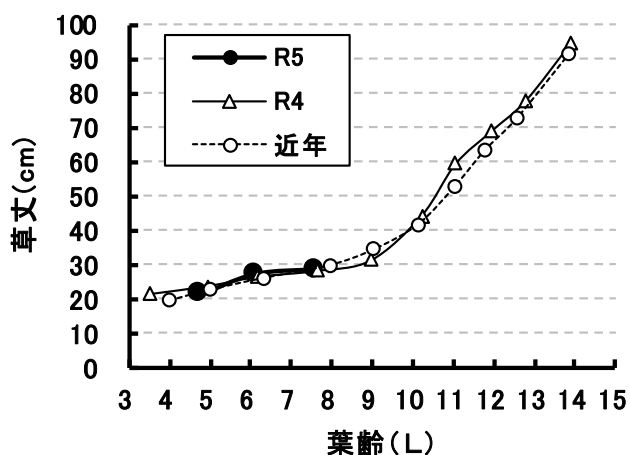


図1 草丈の推移（富富富生育観測ほ等）

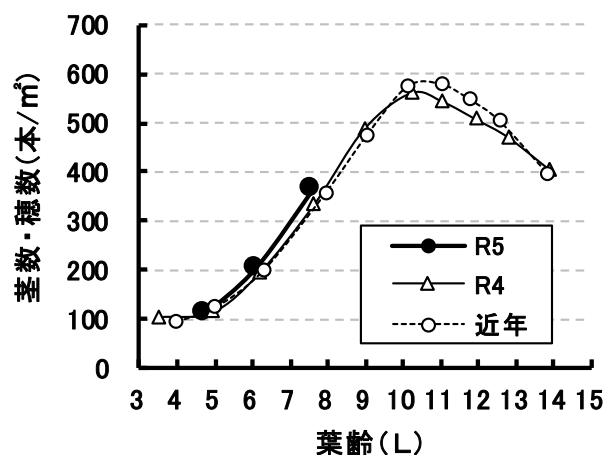


図2 茎数の推移（富富富生育観測ほ等）

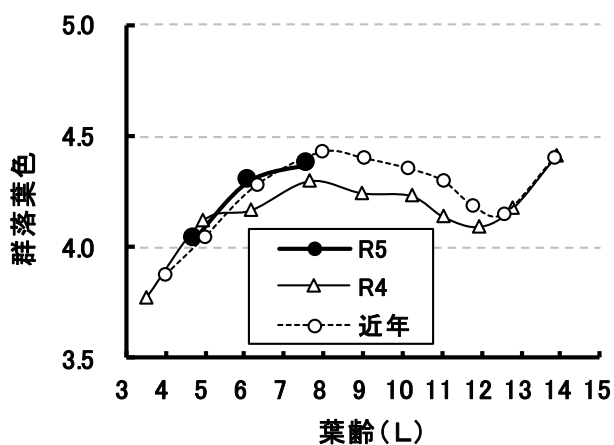


図3 葉色の推移（富富富生育観測ほ等）

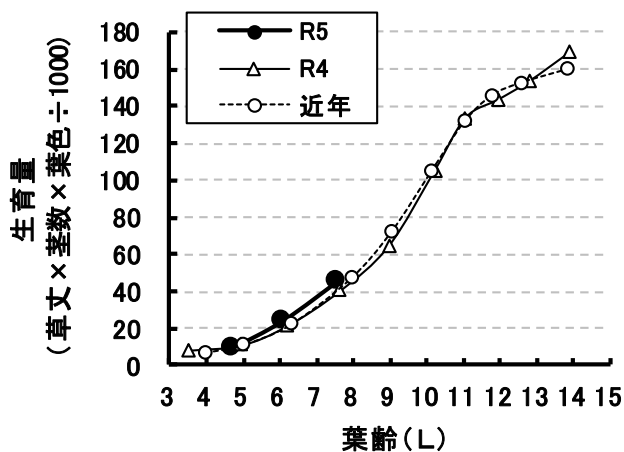


図4 生育量の推移（富富富生育観測ほ等）

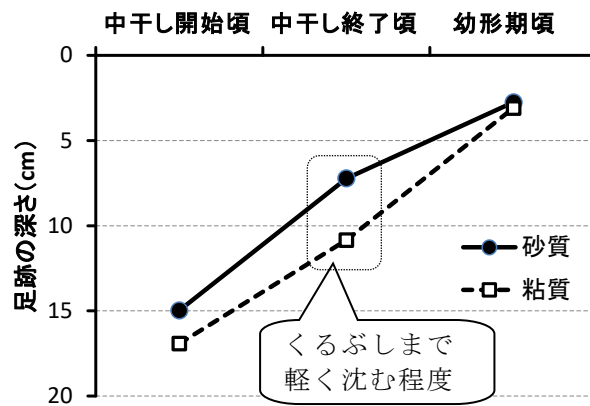


## 2 当面の技術対策

- ・ 中干しを実施していないほ場は、早急に中干しを開始する。
- ・ 中干し後は幼穂形成期まで落水期間が長めの間断かん水を行い、幼穂形成期頃までに足跡の深さ 3 cm 程度の土壌硬度に誘導する。

### (1) 水管理

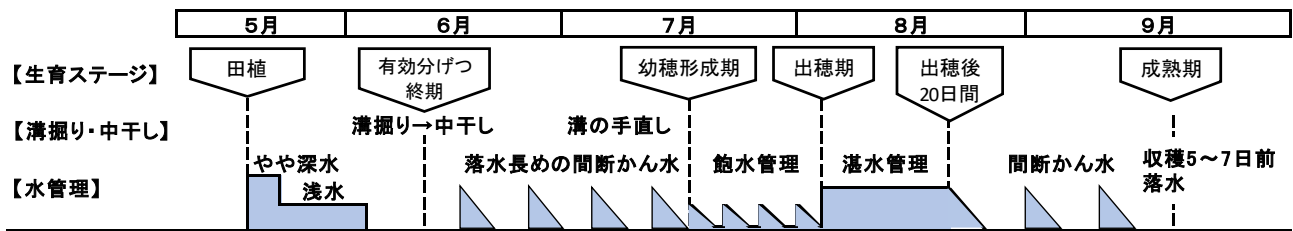
- ・ 茎数が多くなっているため、中干しを実施していないほ場は早急に中干しを開始する。
- ・ 中干し後は幼穂形成期まで落水期間が長めの間断かん水を行い、幼穂形成期頃までに足跡の深さ 3 cm 程度の土壌硬度に誘導する。また、籾数の適正化のため、幼穂形成期の SPAD 値 35 (群落葉色 4.0 程度) に誘導する。



中干しの終了時に、ほ場中央部でくるぶしまで軽く沈む程度を目安とする。

図5 ほ場中央部の足跡の深さの推移 (H22、23 生育観測ほ)

### <水管理のイメージ>



幼穂形成期に SPAD 値 35 (群落葉色 4.0 程度) に誘導するため、中干し後は幼穂形成期まで、落水期間が長めの間断かん水を実施。

### (2) その他の管理

病虫害及び雑草防除は、コシヒカリに準じて実施する。ただし、生育期間を通した化学合成農薬の成分使用回数が 12 以内となるよう留意する。

次回の調査日は 6 月 20 日 (火) です。  
「てんたかく」は幼穂長の調査をお願いします。